

EurekaXIV

六年制通信 No.2 令和8年4月17日(金)号

運の無駄遣いについて

まさか新入生代表から「文武不岐」という言葉が出るとは思いませんでした。我が学園は水戸藩の藩校である弘道館に端を発しているのですが、この弘道館の教えが「文武不岐」なのです。この言葉と校訓「真剣味」を繋げて話していましたね。驚きもしたし感心もしました。また、合唱部による歓迎の歌もよかったね。あの始業式の風景を壇上から見てみると、君たちはいい生徒だと、この学校はいい学校だと思います。

さて、忘れないうちに8日の始業式で話したことを少し肉づけして書いておこうと思います。いつものように、新入生が困っていたら助けてやってほしいということと、新6年生に対して「時はあつという間に過ぎるが毎日ぶれずに勉強を続けること」が大切だという話をしましたね。そのあと今回のテーマとして運の話をしました。

君たちにも経験があると思いますが、例えば何かの試合がある、模擬試験がある、だから何時までに目的地まで行かなくてはいけない、そんなことがいくらでもありますよね。そんな日に寝坊をしてバスや電車に滑り込んで、何とかギリギリで間に合った、そんな経験のある人もいるでしょうし、そういうギリギリで飛び込みセーフみたいな人を見たこともあると思います。そんな時、「よかった、間に合った。ラッキー！」とか「駅に着いたら電車が来るところでさあ。ほんとに運がよかったよ」と思ったり口にしたことはなかったでしょうか。あるいは誰かがそんなことを言っているのを耳にしたことはなかったでしょうか。私はこれまでに何度も耳にしてきました。しかし、ここで立ち止まってよく考えてみて下さい。ギリギリセーフの人は本当に運がよかったのでしょうか。その人の周りには、寝坊もせず十分な余裕をもって現地に到着し、すでに準備運動を終えている人もたくさんいるはずですよ。ギリギリセーフのAさんは自分のことを運がよかったと思っている。十分な余裕をもって現地に到着しているBさんは、そもそもそんな自分を運がよかったとは考えていないはず。当たり前前のことをしているだけだと捉えているはず。ちょっと思い出したのですが以前テレビで誰かが家で足を滑らせて腕を骨折して救急で運ばれたらたまたま担当医が整形外科の医師だった、そんな話をしたらインタビュアーが「それは運がよかったですね」と言ったのです。しかしそのゲストは本当に運がよかったらこけて腕を折ったりしませんよと笑っていました。多くの人はそもそも毎日滑ってこけることなく生活しているわけで、そのことを運がよかったとすら考えていないでしょうね。

私は、ひょっとしたら人間に与えられている「運の総量」は決まっているのではないかと思う時があります。誰でも同じだけの運を平等に与えられているのではないかと

考えることがあります。もしそうだとすると、運の悪い人というのは、今までにつまらないことで運を消費してしまったのではないかと思うのです。幸田露伴も運は惜しまなくてはならないと言っていますが、先ほどの A さんなど、完全に自分の不注意による運の無駄遣いをしていますよね。これは癖になる可能性があります。それだけに危険なのです。運の無駄遣いは、私たちが与えられている本来の運に匏（かんな）をかけているようなものです。匏で削りとられる運は非常に薄く、気づかない程度のものでしょうか。しかし、毎日匏をかけていれば、一週間で 7 枚、一か月で 30 枚、一年で 365 枚、入学以来 6 年後には 2190 枚になります。想像できますか。運は心に与えられるものでしょうから、君たちの心がどれだけ薄っぺらなものになってしまうかを。これとは逆に運を大切にしていけば、勉強でも何でも「積み重ね」が大きな力になるように、やがて君たちの心も大きく豊かなものになるのです。薄いオブラートも 2190 枚重ねれば十分厚く丈夫なものになるでしょう。君たちは A さんではなく B さんにならなくてははいけません。A さんのようなつまらん運の無駄遣いをしてはいけません。それにはどうすればいいか。何事にも準備を怠らないことです。準備を怠らないためには時間をかけることです。時間をかける決心をすることです。その妨げになる心は何か。君たちが B さんになる道を阻もうとする心は何か。つまり、もっとも運を無駄遣いしてしまう考え方とは何か。それは「めんどくさい」と思う心です。明日でいいやと思う心です。これらは時間を大切にしていないから出てくる考え方です。このことをよく考え、こころを厚く丈夫にするような学校生活をしてください。

今週のおすすめ

・下村敦史 『黙過』 (徳間文庫)

またまた下村さんですかと言われそうですが、かなり前に読んで面白かったのを思い出していただけなのです。タイトルの「黙過」とは「知らないふりして見のがすこと」です。本の裏表紙に最終章の「究極の選択」は最後に読むことを強くお勧めします、とあるのですが、要するに順番に読んでいけばいいだけかと思ひ読み進めました。最終章を含めて全五章。「優先順位」は臓器移植をめぐる優先順位に悩む新米医師のお話。「詐病」はパーキンソン病の元エリート官僚の父を介護するうちに父の病気は詐病ではないかとの確信に到る息子たちと、なぜそんな真似をしなければいけなかったのかという父の告白のお話。「命の天秤」は養豚場に押し掛ける過激な動物愛護団体ともうすぐ子豚が生まれるはずの母豚百頭のお腹から子豚が忽然と姿を消す不思議な物語。「不正疑惑」は学術調査官を務めるほどの優秀な医師が「人間として赦されないことでした」という遺書を残して自殺した。親友の医師にある記者が「彼には不正疑惑があった」と告げる。そんなはずはないと思ひながらも記者に協力するうちに意外な真相が浮かび上がる物語。そして「究極の選択」で、一見何のつながりもないように思えた四つの物語が一つになっていきます。このあたり、いつもながらうまいですね。

この作者の本は、これからも何度も紹介することになると思います。

BGM は Superfly の 愛をこめて花束を でした…。